

過熟社会における酪農場と草地開発の視点 (その1)

篠原 功 (酪農学園大学)

最近、大都市への人口集中が進み、その過密に問題があるとの声をしきり聞くが、それでも都市は華やかで老若男女に満ち活気ある強壮社会となっている。これに対して地方の小都市や農山漁村では若者の流出による人口の過疎に加えて人々の高齢化が進み虚弱社会となってきている。このことは酪農地帯においても同様である。

いま社会状況の変化を概観すると、一見、経済数値の上では豊かになったように見える。しかし、それが生活の質を支える社会資本の充実度から眺めると、今時の社会は、ひそかに民衆が民衆を植民地化する形で利権・金融ゲームが進み、資金の偏在過剰流動が勤労価値を低下させて「貧富=所得×享受できる社会資本の質」の差が拡大しつつあるようにも見える。しかもこの格差を調整するための施策も多少ではあるがとられている。しかし、その効果は疑わしく、かえって格差拡大の機能として作用する表裏逆行の虚構社会を造っているように見える。すなわち、社会の構成員一人一人はまじめに生きようと頑張っている。それにもかかわらず全体としては老化が進み神経の切れた細胞たちの集団、それは我が国全体が過熟社会になって行こうとしているということなのだろうか。

ここで、筆者が過去30年にわたり折りにふれ我が国各地を歩き、その間とくに人間生活の観点から眺めた都市と農村の変貌するコントラストのなかで、農村が抱える深刻な問題点を幾つか拾ってみるとつぎのようである。

- (1) 一部の人々ではあるが仲間がいない。後継者がいない。または後継者に配偶者が得られない。
- (2) 休日が少なく、生活にめりはりがなく、しかも労働に見合った所得が得られない。または安定した職場がない。あるいは遠い。
- (3) 異業種に働く人や価値観の異なった人々と出会う日常的なコミュニティがない、あるいは遠い。
- (4) 医療サービスや教育を受けるのに不便である。
- (5) 農業勤労者に対する社会保障制度は他産業のそれに比べて不利である。
- (6) 地域社会が小さく閉鎖的でプライバシーが保てないばかりか常に社会の流れから遅れがちである。
- (7) 買い物を楽しむところがなく、生のファッション情報やその他必要な情報をつかみにくい。また食糧品をはじめとする生活用品の種類に乏しく割高である。
- (8) 酪農業の職場は一般に汚く、異様な臭いを伴い、しかも身体に異臭が染み付く。
- (9) 職場社会が極めて小さいか、あるいは一人ぼっちで寂しく、またネクタイやスカーフをつけて田畑や畜舎に出勤して頑張ってみても年頃の異性と出会うことは少なく、その姿は家族や作物や牛にしか見ってもらえず、人間の本質は身も心も衣も食も住もお洒落の演出なのに、スリルやドラマが少なく張り合いがない。
- (10) 農場現場勤労者の多くは自営者=資本家という意識に甘んじておりセンスが古い。
- (11) その他、農業の重要性を説く精神訓話と生活実感との間に大きな隔たりがあり、人生を賭けてそれを越えるには余りにも苦勞が大きすぎる。……等々。

以上の事柄のなかには重複しているものもあり、またここに挙げた事柄が問題のすべてではない。しかし、これらを含めた諸々の条件が重なり合って深刻な事態を醸していることは否めない事実であろう。

著者は、これまで酪農業の現場を歩き、土一草一牛系におけるミネラルバランスの調査研究を本務としてきた者である。そしてこれまでにかかわったミネラルトラブルのほとんどは自然科学的手法で解決できるものであった。しかし、なかにはこれがトラブルの解決できない要因の一つに人間社会の問題、すなわち人手不足などがあった。それが具体的には草地を管理する若者のいないこと、あるいは若者がいたとしても配偶者の得られないままに相当の年齢に達し、かつ年老いた病気がちの家族をかかえていることなどが遠因であると見られるケースも少なくなかったのである。

また他方では、離農したいが農地が売れないとか、規模を拡大したいが乳価の低迷するなかでは高い農地を買うと倒産するという声も聞こえる。また装置産業と言われる酪農場の構造改善のための負債は政府の構造政策の不備によって派生したものであるが、その額は膨大で、1農家1年間当たりの元利返済額は、都市勤労者1世帯1年間の所得に匹敵するという。

上記の事柄が事実であるならば、とりわけ土地依存の強い草地酪農は潜在利権がらみの過大な地代と構造負債から解放されない限り、単なる自然科学的な草地開発・家畜飼養管理技術の改善や経営規模の拡大のみでは農人生活経営の早期安定は望み薄いであろうと考えられる。

ここで、強調したいことは、農村と都市の格差をどのようにして調整するかということであるが、それには農村の社会資本を大都市並に充実させるか、それが無理であるならば農業勤労者とその家族を社会資本の充実した都市に住めるような社会環境を整備しなければならないということである。すなわち今後の「酪農場と草地開発の視点」は今まで以上に「人間」に向けられなければならないということである。

そのためには、いま21世紀の人間生活と酪農場のあるべき姿を想定して、多少極端ではあるが、根釧の酪農地帯と東京23区を同一文化・相互通勤圏にするくらいの発想転換を図る必要があると考える。しかし、著者は社会学的・経済学的手法には疎いので、直ちに専門的検討に入るのは至難のことである。

そこで、今回は以下に著者の直感によるアイデアの項目を提案するにとどめる。

提 案

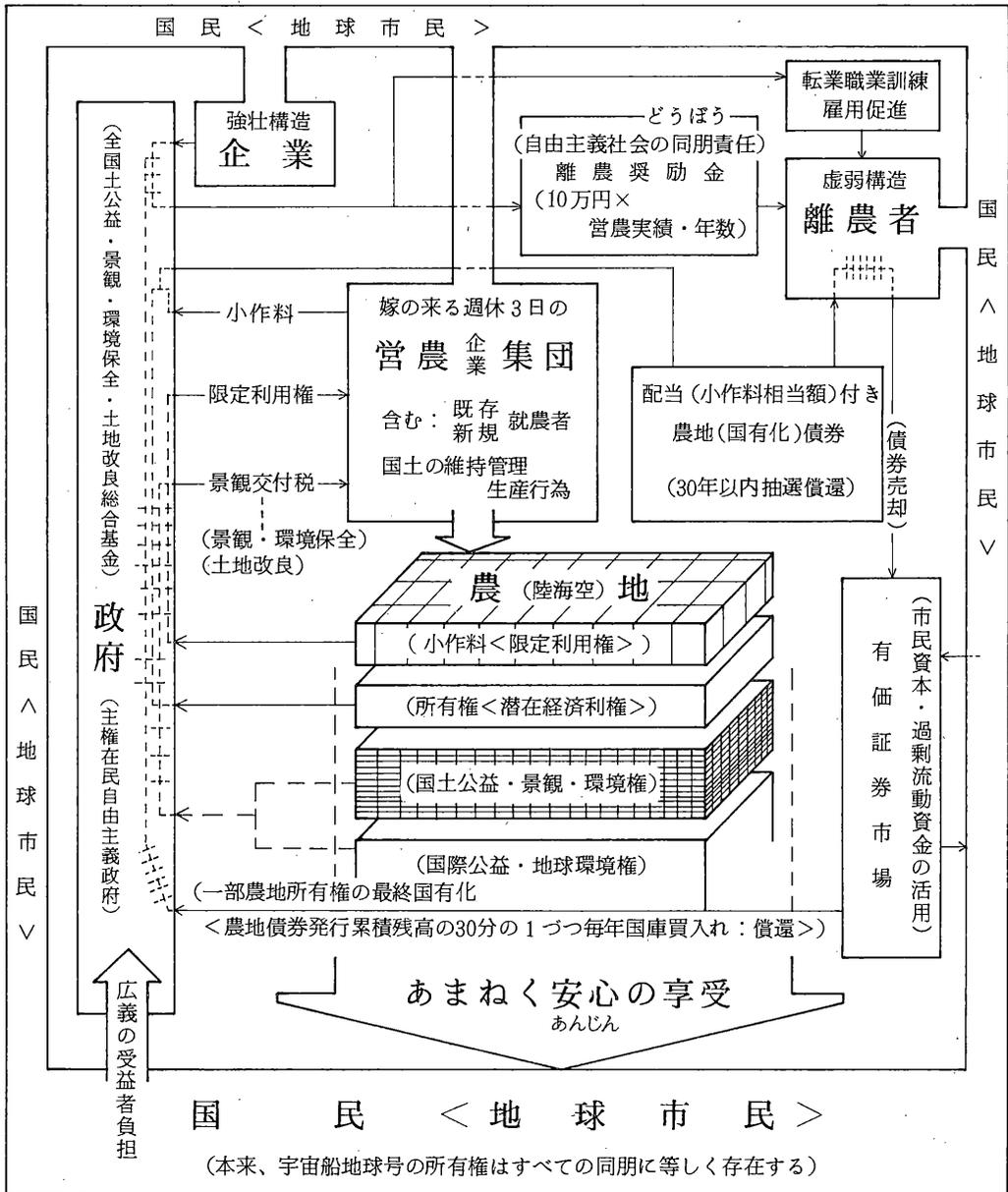
人間生活の観点から眺めた酪農村の深刻な事態(上述)を打開するため、また21世紀の酪農をめざして、農地の一部国有化(図1参照)・離農者増額年金(または離農奨励金)・景観環境交付税の創設、社会資本の充実・週休3日をめざす借地営農企業集団「酪農場の規模—勤労者10~20人+農地300~500ha+搾乳牛200~300頭+育成牛・肉牛・羊など200~500頭飼育+付加価値生産」の育成、職住分離の緑地都市・高速交通(鉄道・道路・エアライン)網「都市住居地から酪農場への通勤時間20~120分程度、全道どこからでも札幌・東京都心へ200分以内」を早急に整備することを提案する。

なお、21世紀型酪農場と草地開発の詳細については次回からの未来スケッチのなかで検討解説する予定である。

参 考 文 献

- 1) 篠原 功, 1986, サンガ(Sangha)を超えて, 今, 日本随筆文庫全集2, P216-273, 近代文芸社文庫(東京)

2) 篠原 功, 1987, 二十一世紀の緑地都市, 暮らしのサイエンス №3, P70~73, 酪農学園出版部 (野幌)



一 図中特定用語の解説一

- 同朋 (どうぼう) ……生きとし生けるものすべて父母兄弟姉妹なりといえる仲間を同朋という。
- 安心 (あんじん) ……人間の宇宙で相互に与え合う無限の安全・安心 (あんしん)、ひとり個人の働きでは獲得することのできない無限の安全・安心 (あんしん) の真実を安心 (あんじん) という。

図1. 二十一世紀型酪農場と勤労者のための営農社会環境の整備目標 (第一次篠原試案<概要>)